

PHJ NEWSLETTER

ピープルズ・ホープ・ジャパン
ニュースレター

巻頭・海外事業

コロナ禍だからこそ 人に寄り添いつづける

CONTENTS

国内事業

南相馬心療カウンセリング支援
事業の最終年を迎えて

支援企業訪問

キャノン株式会社
パートナーシップで SDGs に貢献



PHJ カンボジア事業地のクポッタゴン保健センターのスタッフ



母子保健推進員の教育。コロナ禍の中では住民に正しい情報を伝える彼女たちの役割がさらに重要になる

コロナ禍だからこそ 人に寄り添いつづける

今も世界中の人々を脅かし続ける新型コロナウイルス（COVID-19）の感染拡大。PHJの事業地であるカンボジア、ミャンマーも例外ではありません。話し合いや教育活動を通して人々の健康を守るというPHJの大切な活動が、感染リスクを伴うことから制限されるといった状況にも直面しました。しかしコロナ禍であっても、安心安全な出産や健康な子どもの誕生と成長を支えることは重要です。様々な制約の中でカンボジア、ミャンマー両国で感染予防に努めながら、健康を守る仕組みづくりに取り組み続けています。両国での感染者確認からほぼ1年。両国の駐在員が改めて、コロナ禍におけるPHJのカンボジア、ミャンマーでの活動を振り返ります。

Cambodia



Myanmar



Japan

カンボジア

コロナ禍のPHJの対応や活動

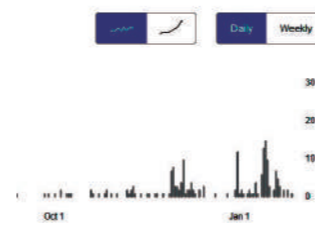
- 2020年
- 1月：カンボジア国内で初の感染者確認
- 3月：コンポンチャム州内で感染者確認
- 4月：感染拡大予防の為政府が旧正月を延期
 - ・医療物資を12保健センターと地方病院に寄贈
 - ・保健ボランティア、保健行政区長、保健センタースタッフの会議にて、COVID-19に関する情報共有と感染拡大防止の指導
- 7月：日本の個人支援者からの布マスクを保健センターに寄贈
- 10月：日本の複数の個人支援者から布マスクを医療ボランティアに寄贈



COVID-19 感染予防の啓発活動

カンボジア： 新型コロナウイルス感染者数推移

感染者の合計数 461人
(2021年1月29日時点)



出典：WHO Coronavirus Disease (COVID-19) Dashboard

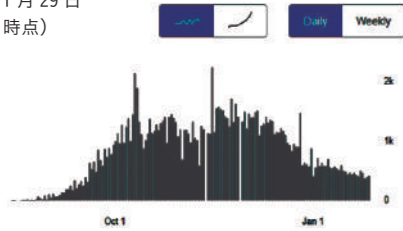
ミャンマー

コロナ禍のPHJの対応や活動

- 2020年
- 3月：ミャンマー国内で初の感染者確認
 - ・母子保健教育、定期会議、研修などの活動が延期
- 4月：タッコン郡保健局とレウエイ郡保健局に医療物資寄贈
 - ・日本人駐在員一時退避帰国。
- 5月：COVID-19各種規制の一部緩和
 - ・タッコン郡保健局とレウエイ郡保健局に医療物資寄贈
- 6月：補助産師と母子保健推進員に地元で縫製した布マスクを寄贈
- 7月：郡が管轄する隔離施設が全て閉鎖
 - ・ネビドーと地域外の移動制限の解除
- 8月：感染予防対策を徹底しながら、全ての活動を再開
- 9月：国内の急激な感染拡大により、ネビドーと地域外の移動制限が再強化
- 10月：タッコン郡保健局とレウエイ郡保健局に医療物資寄贈

ミャンマー： 新型コロナウイルス感染者数推移

感染者の合計数
138,802人
(2021年1月29日時点)



出典：WHO Coronavirus Disease (COVID-19) Dashboard

PHJカンボジア事務所駐在員はカンボジア現地にとどまり事業を継続。現在、国内の新規感染者は少ないものの、事務所内や活動中もマスク着用や手指消毒等を徹底し、感染予防に努めています。現地の人に寄り添って活動を続けていく

PHJは「人と寄り添うこと」を活動において第一としていますが、コロナ危機が起こるまで、私はそれがどういふことなのか、深く考えたことがありませんでした。去年の1月にカンボジアで新型コロナウイルスの最初の感染者が確認され、3月になると感染は隣国でも拡大し、本部から帰国を勧められました。コンポンチャム市では国際機関やNGOの外国人スタッフが帰国し始めました。それを見ながら、何が正しい選択なのかと迷っていました。保健行政区長から活動は継続してほしいと言われていた矢先、事業地近くに感染者が出たという情報が入りました。それを聞いて現地スタッフ全員が「事業地には行かずに、遠隔で業務させてほしい」と言い出したのです。

事業地自体で感染者が確認されていないこと、また、活動時の感染予防を徹底すると約束しても、彼らの気持ちは変わりませんでした。最終的に「私も一緒に事業地に赴いて全ての活動に参加

PHJミャンマー事務所駐在員は一時帰国し、遠隔から現地スタッフと連携しながら、事業を継続。渡航が可能になり次第、現地へ戻り事業を進めていく予定です。

リモートでスタッフと一体感

2020年4月末に日本へ一時退避帰国してから現在まで、遠隔で事業管理を行っておりです。私自身、今まで遠隔での業務経験がなかったので、うまくできるのかと最初は不安に思う事のほうが多かったです。現場や事務所の雰囲気がかめなかつたり、伝えたいことがうまく伝わらなかつたりと、始めたばかりの頃はどうすればいいのだろうと悩んだ時期もありました。しかし、この環境の変化に適応するためスタッフが努力してくれたこともあり、時間の経過とともにコミュニケーションがスムーズになり、離れていてもPHJミャンマー事務所としての一体感を感じながら日々業務を行うことができています。現地でも感染が広がる中、助産師を始めとする医療従事者の方たちは、感染



オンライン会議をするPHJミャンマー事務所スタッフ

加し、皆と同じリスクを背負う」と伝えたと納得し、現地での活動を継続することを決めてくれました。

その時、村びとやカウンターパートに寄り添うだけではなく、現地スタッフに寄り添うことも私の大事な役目だと実感しました。その後、感染拡大はある程度収まり、予定された活動とニーズに合わせた追加活動も実施することができました。関係者や村びとからは、たくさん感謝の言葉をいただきました。コロナ危機の中、皆、様々な思いや気持ちを胸に業務しています。「人に寄り添う」ということが一体何であるか、私はまだ完全にはわかりません。もしかすると、それが何なのかを知っている人はこの世界にはいないのかもしれない。しかし、今回私を含めたカンボジア事務所スタッフ全員はこの経験から、その一端を理解できた気がします。

PHJカンボジア事務所長 石山加奈子



日本から届いた布マスクについて解説しながら寄贈

予防対策に関わる多忙な業務に従事しながらも、PHJの活動に全面的に協力して下さいました。厳しい状況にもかかわらず、人々の健康を守るために奮闘する彼女たちの熱意に心を動かされました。コロナ禍では特に人と直接会うということがかけがえのないことだと気づかされ、また人は困難な状況においてもそれに順応し、前に進むという力があることを学びました。

PHJミャンマー事務所長 蓮井頼子

現地スタッフのオーナーシップの醸成へ

一時退避帰国直後は、遠隔事業管理の中で、スタッフとの意思疎通にもどかしさを感じたり、活動計画の変更にも悩む瞬間もありましたが、これまでの学びを活かして、今ではより良いコミュニケーションが取れ、現地スタッフのオーナーシップが醸成される良い機会にもなりました。関係者の安全を確保しながら活動を実施する試行錯誤の日々ですが、このような状況だからこそ、医療の格差が広がらないよう、農村地域の母と子の健康のためにできることを、変革を恐れず情熱を持って果敢に挑戦していく仲間がいることのありがたさと、ミャンマーの人々の強さを、あらためて学び感じました。

PHJミャンマー事務所 プロジェクトマネージャー 久米理沙

🗣️ **カンボジアとミャンマーのお母さんに聞く**

小児科医が感染し、
生まれたばかりの
子どもの受診が
遅れてしまいました。

2020年7月に出産



Myanmar

パ ンデミックの中で大変だったことのひとつ目は、赤ちゃんの顔に発疹が出たときに小児科医の受診が遅れてしまったことです。

近所のヤメティン郡に勤務している小児科医がCOVID-19に感染し、すべての患者が隔離センターに隔離されたそうです。そのため、病院に行かず自分で薬を購入しました。しかし赤ちゃんの発疹は良くならなかったため、3日後赤ちゃんを連れてレウエイ郡病院の小児科医の診察を受けました。その結果、赤ちゃんの発疹は治ったので、安心しました。

ふたつ目は、毎年楽しみにしているティンジャン祭り（ミャンマーの旧正月水まつり）やカソン祭り（マハ菩提樹での水飲み式）などのお祭りに、COVID-19の感染対策のため、参加できなかったことが残念です。

コロナ禍で人々の健康を守る事業をささえる

タン・タン・シン
会計担当

「最初はオンラインでのコミュニケーションを少し難しく感じていました。しかし、今は以前より良くなっていると感じています。COVID-19 パンデミック下での今年の会計監査の準備は私にとって挑戦です。仕事、病気、移動、経済は安定せず、すべてのものはいつでも変わる可能性があるということを感じています。」

ピョー・ミン・テュ
プロジェクト・オフィサー

「3ヶ月間通常の活動を行うことができませんでした。活動が再開されてからは、COVID-19の感染予防策にも注意しています。保健スタッフとの接触や地域での母子保健活動を実施する際、感染リスクをいつも心配しています。事務所長とプロジェクトマネージャーとのオンラインによるコミュニケーションは、最初は大変でしたが、いまは慣れてきています。コロナ禍を通して友達や家族と一緒にいることの大切さに気がきました。」

ピョー・ゾウ・アウン
プログラム・オフィサー

「PHJでも一部の活動が制限されることがありました。新規事業活動を計画通り開始できない、政府機関へ資金提供を申請する機会を逃してしまったりといった困難がありました。このような状況で、事務所長とプロジェクトマネージャーが不在の間、現場における責任が大きくなり、特に保健省との覚書の締結は挑戦でした。しかし、PHJスタッフがそれぞれの仕事にしっかりと取り組んでくれたので助かっています。」



PHJ ミャンマー事務所
現地スタッフ

アウン・トゥー・ミン
フィールド・オフィサー

「COVID-19の感染リスクを軽減するために働き方や活動方法が変わりました。PHJの活動も計画通りにできませんでしたが、日本からの支援と、COVID-19への対応で多忙な中でも、活動に協力的なミャンマーの保健スタッフのおかげで活動を再開できたことに感謝します。この状況は、貧富、宗教、文化、習慣に関係なく、私たちすべての人が同じである、ということをお教えてくれました。」

コロナ禍での出産事情



Cambodia

2 020年前半は特に、村びとが怖がって外出せず、ゴーストタウンのようでした。食材を買いに外へ行くにも不安でした。親戚や友人にも会いに行けませんでした。病気で入院している母親のお見舞いにも行けず悲しかったです。それと共に、物価が上昇したり、学校が休校になり子どもが学校で学べなくなったのもとてもショックでした。そんな時期に、ちょうど私は妊娠中だったため、もし私が感染してしまったら、そしておなかの子どもや長女と次女にうつってしまったらどうしよう、と一日中考えていました。しかし、家族の協力があり、マスクや石鹸などたくさん購入してできる限りの感染予防をし、無事に保健センターで出産を迎えることができました。赤ちゃんも元気に育っています。今では手洗いやマスクは習慣となり、子どもたちは食事前やトイレ使用後は私が何も言わなくても石鹸で手を洗うようになりました。

妊娠中に感染しないか
不安でしかたが
ありませんでした。

2020年9月に出産



PHJ現地スタッフの視点

「COVID-19は遠い国で起きている話だと思っていましたが、2020年1月に感染者が確認されたときは、皆がパニックになりました。支援事業に関しては、いくつかの活動が一時中断され、最近の研修や指導支援などで積み上げてきた知識やスキルをカウンターパートが忘れてしまうかもしれないと心配でした。」

その他、私生活上の制限や負担も私たちの精神状態に大きく影響しました。友人や家族に好きなきに会えない、外に出られないといったストレスと共に、物価も上がり生活への不安も生まれました。そのような中、感染が怖く事業地に行くのもかなりの覚悟が必要でした。半泣きになりながら村へ向かったこともありました。様々な困難や不安に直面しましたが、最後は自分たちの役割を果たすことを皆で選びました。

困難の中で、学びもありました。ウイルスという見えない脅威から自分や他人をどう守るか、お互い助け合うこと、他人を思いやることなどがどれだけ大切かということです。確かにコロナ禍はいいことではありませんし、COVID-19のない世界の方が皆幸せに暮らせます。しかし、この危機が私たちの結束をより強くしてくれたこと、私たちの活動の目的やビジョン、自分たちの存在意義などをより明確に見せてくれたことも確かです。これからも私たちカンボジア人がカンボジアの人々のために活動し続けます。」



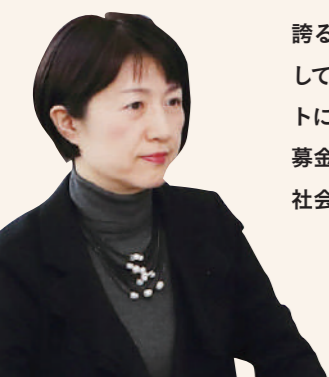
PHJ カンボジア事務所
現地スタッフ

写真左から、アウン・スレイレアン（プロジェクト・オフィサー）/ チュン・シノル（プロジェクト・オフィサー）/ ドウーク・ソボルン（プロジェクト・アシスタント）/ リ スレイナット（プロジェクト・アシスタント）/ ボルン・ボルン（ドライバー）/ チュン・ソベック（総務・会計担当）



ミャンマーへ寄贈された
キヤノン製プロジェクターを
活用した研修

カメラやプリンターの分野で高い世界シェアを誇るキヤノン(株)。1998年よりPHJの賛助会員として支援いただいています。また特定のプロジェクトに対する寄付、キヤノン製品の寄贈、マッチング募金など、様々な形で支え続けてくださっています。社会貢献に対する想いについて伺いました。



CSR推進部 部長
木村純子 様

支援企業訪問

パートナーシップで SDGsに貢献

キヤノン株式会社



PROJECTS IN JAPAN

福島県 南相馬市

南相馬心療カウンセリング支援

事業の最終年を迎えて

2020年は年間を通して新型コロナウイルス感染拡大が、ほりメンタルクリニックのカウンセリング及び検査にも大きな影響を及ぼしました。南相馬市では2020年4月に初の感染者が確認されて以来、感染者は徐々に増えています。

このような状況の中、ほりメンタルクリニックでは遠隔診療システムを導入してオンラインと対面式の両方を取り入れた診療を行っています。

また事業開始からカウンセリングの中心として活躍いただいていた米倉臨床心理士が事業から退かれました。代わりに堀先生が認知行動療法(PE)によるカウンセリングをクリニック開始時間前に実施しています。

堀先生より半年間の振り返りと事業最終年に対する想いをまとめていただきました。

「2020年はCOVID-19の影響のために非常勤の心理士の先生方が、ほりメンタルクリニックでの勤務が困難になる、という当初の事業スキームに

大きな見直しが必要となる事態への対応を迫られる中で、この半年間で以下の3つのことを達成することができました。

① PTSDへの認知行動療法であるPE法を堀が8人の患者さん(合計61セッション)に実施しました。ほとんどの患者さんで改善が認められました。

② 福島が活動の中心である高橋先生による心理検査を再開しました。児童精神科医が不足している被災地において、発達障害等についての正確な評価が可能となったことは治療上大変有益な影響がありました。

③ 東京を拠点にしている榊原先生による、インターネットを用いた遠隔カウンセリングを実施したところ、十分な治療効果があることが確認されました。

企業活動だけでなく社会貢献もグローバルかつ多彩に

「共生」を理念に、グローバルに企業活動を展開しているキヤノン。世界各地でその地域のニーズや課題に対応した多彩な社会貢献活動をすすめています。たとえば「チャリティブックフェア」では従業員から寄贈を受けた本や使わなくなったカメラ・レンズなどを社内で販売し、売り上げの一部に会社からのマッチングを加え、PHJの支援に役立てて頂いています。また、過去にはミャンマーの農村地域における活動に向けてミニプロジェクターを寄贈しました。弊社のイメージング製品が意義深い活動に活用されることを嬉しく感じています。

InstagramでCSR活動を発信
www.instagram.com/canon_csr/



PHJとのパートナーシップでSDGsへの貢献を

いま、企業にも持続可能な開発目標「SDGs」への貢献が求められており、キヤノンも事業を通じてさまざまな活動を行っています。また、PHJもゴール3(すべての人に健康と福祉を)を柱に、ゴール5(ジェンダー平等とすべての女性と女児の能力強化)、ゴール6(安全な水とトイレを世界中に)に向けて活動を展開されています。私も、PHJへの支援がSDGsの実現に資するものと考えています。さらに、両者の協力関係がゴール17で示された「パートナーシップで目標を達成しよう」に繋がることを願っています。

良い社会づくりに向けて

今後も社会のさまざまな課題解決のために、お互いの得意領域で貢献するとともに、パートナーシップを継続し、よりよい社会づくりを共に進めていきたいと思えます。引き続きよろしくお願ひします。

インタビューを終えて

—キヤノン(株)の掲げる「共生」やパートナーシップという言葉が核となり、PHJの活動をつねにご支援してくださっていることがわかりました。貴重なお話、ありがとうございました。

最終年である3年目は、ここまで積み上げてきたものを確実に継続するとともに、地域社会に対してPTSDとその治療を中心に啓発活動を行っていくことにも取り組み、震災後10年が経過しても知られずにPTSD等の症状に苦しむ方々の生活の改善に寄与して参ります。」

カウンセリング担当の先生方



高橋臨床心理士

榊原臨床心理士

堀 院長

後期事業の計画・実績

	計画(2020年7月~2021年12月)	実績(2020年7月~2020年12月)
カウンセリング担当	榊原先生、横内先生、高橋先生	堀先生、榊原先生、高橋先生
心療検査	72件	36件
EMDR*2	432件	84件
認知行動療法	78件	61件
支出合計	720万円	234万円

*1: 本事業の前期は2019年1月~2020年6月、後期は2020年7月~2021年12月となります。

*2: EMDRは、Eye Movement Desensitization and Reprocessingの略です。眼球運動を用いてフラッシュバックを主とするトラウマ症状を軽減します。

PHJお知らせ掲示板

2021年チャリティカレンダーの報告

PHJの2021年アジアのおいなしカレンダー募金には、2,451,000円(2020年10月～2021年1月)集まりました。募金にご協力いただいた皆様ありがとうございました。



第62回運営委員会 開催報告

11月17日に第62回運営委員会をオンラインで開催しました。運営委員9名、オブザーバー5名、PHJスタッフを含む30名が参加。カンボジア、ミャンマー、南相馬支援事業の報告や募金活動や資金調達の新たな提案を行いました。

なお、オンラインの利点を活かして、カンボジアの事業対象地の保健センターともつながり、現地からリアルな

声をさくことができ、臨場感あふれる報告会となりました。会の最後にはUHCデーWEBキャンペーンに参加するため、参加者がロゴを掲げました。

運営委員会は委員以外の方もオブザーバーとして参加いただけます。ご興味ある方は開催前のご案内が来た際にお申込みください。



UHCデーWEBキャンペーンに参加



カンボジアの医療スタッフや地域住民も参加

編集後記

この編集後記を書いている今、ミャンマーの緊急事態宣言のニュースが飛び込んできました。人々の命や健康を守っていくことを困難にするような状況が次々と生まれています。表紙のカンボジアの保健センタースタッフのように手を合わせて祈るような気持ちになります。PHJとして何ができるかを考えていきます。